



Bedside Learning と Case Report

☆推薦文☆

京都 43 期卒、初期研修医 2 年目の奥村尚稔先生が稀な病態を自ら診断し症例報告としてまとめました。*Okumura H, Ishino H, Yokoi D, Matsumura M. Palmar fasciitis and polyarthritis syndrome associated with lung adenocarcinoma. Intern Med. 2021. doi: 10.2169/internalmedicine.8619-21.* 診断時から論文化まで支援させていただきました。症例報告まで書き上げられたことは、奥村先生が学生時代から、診察所見を正確にとり記述する能力（手掌腱膜の肥厚と関節炎の存在が分かる）、多くの経験（実践知）を積もうとする努力、文献を調べる能力、書く能力、これら基礎となる能力をしっかりと身につけようと努力してきた証しです。稀な疾患でしたが、まさに *Chance favors the prepared mind* ということでしょう。

地域医療学センター総合診療部門 松村正巳

京都府立医科大学附属北部医療センター初期研修医 奥村尚稔（京都 43 期卒業）

皆様はじめまして、京都43期の奥村尚稔と申します。現在、京都府北部の地域中核病院（290床程度）で初期臨床研修をしています。今回、地域医療および初期研修に従事する中で出会った希少疾患〔肺腺癌に関連するPalmar fasciitis and polyarthritis syndrome (PFAPS)〕の症例報告が、松村正巳先生のご指導のもとでInternal Medicineに受理されましたので、その経緯を記します。



【フリーコーススチューデントドクター制度での経験】

大学生の頃、フリーコーススチューデントドクターに選ばれ、好奇心の赴くままに勉強する1年間を過ごしました。メンターの森澤雄司先生に相談しながら、自由にカリキュラムを組めるのが特徴で、多様な病院・先生をご紹介頂き、勉強に行きました。ベッドサイド診察で、数多のClinical pearlを教えて頂きましたが、その一つに『（患者さんに）触れば大体のことは分かる。』というのがあり、このPearlは強く心に残っています。さらに、本制度では、日本・世界の医療を牽引する先生にお会いする機会も多々あり、私の中でacademic physicianへの憧れが強くなっていました。

【いざ義務年限が始まって】

「義務年限で地域医療に従事している時も、論文執筆は積極的に挑戦したい。」と強く思い卒業しましたが、いざ働き始めると仕事に翻弄され、学術活動に挑戦する余裕もない日々が待っていました。フリーコーススチューデントドクターの頃には、無限のように広がっていた医学の世界が、仕事開始と同時に狭まっていくような感覚に陥りました。どうすればもっと楽しく臨床ができるのか、初期研修医1年目は思案に暮れました。

【希少疾患の診断から症例報告まで】

仕事にも慣れてきた2年目の初夏のことです。当時ローテートしていた総合診療科の指導医から「腫瘍随伴性の関節炎疑いの患者さんが精査入院されるけど、少し不思議な所もあって、考えてみて下さい。」と言われました。リウマチ膠原病疾患に関心があった私は、興味を持ってベッドサイドに行きました。患者さんは、気さくな高齢男性で、関節痛よりも『指が曲がらない』ことに一番困ってらっしゃるようでした。触診してみると、手指屈筋腱は著名に肥厚しており、多発関節炎を伴っていました。この時、かつて学生時代にベッドサイドで経験したPFAPSの症例、すなわち『(患者さんに) 触れば大体のことは分かる。』というPearlを教えて頂いた時の症例と同じ所見を呈していました。PFAPSは希少疾患のため指導医にも馴染みのない疾患でしたので、勇気を出して、医師としてのイロハを教えて頂いた松村先生に相談しました。先生は、PFAPSと診断するために除外すべき疾患とPFAPSとして確からしい所見を、丁寧に私に示して下さい、自信を持って診断できました。治療は奏功し、良好な転帰を辿ってらっしゃいます。この貴重な経験を症例報告として残したいと考えましたが、独学での作成に大きな壁を感じ、再び松村先生にご相談させて頂きました。症例報告作成に関して一から手解きを受け、1回のminor revisionを経て、約5カ月後にInternal Medicineに受理されました。

【今回の症例報告を通して】

症例報告に至ったきっかけは、学生時代のベッドサイドでの学びが発端にあると考えます。ウィリアム・オスラー先生も「3時間の座学よりもベッドサイドの15分間が勝る。」と箴言を残しておられ、ベッドサイドでの時間は非常に学びの深いものです。また、今回の症例報告を通して、臨床推論についてより深く学ぶことができました。指導を受ける中で、鑑別疾患の除外方法など松村先生の思考に触れることができ、私の臨床推論の幅が広がりました。ベッドサイドの時間とリサーチマインドを大切に、今後も地域医療の場から発信を続けていきます。

最後に、いつも温かくご指導して頂いている、総合診療部門の松村正巳教授には心より感謝申し上げます。

地域医療オープン・ラボNews Letter原稿募集

地域医療オープン・ラボでは、自治医大の教員や卒業生の研究活動を学内外へ発信するために、「自治医科大学地域医療オープン・ラボNews Letter」を定期的に発行しています。

<http://www.jichi.ac.jp/openlab/newsletter/newsletter.html>

- ☆ 自治医大の教員や卒業生の研究活動をご紹介ください
- ☆ 自薦・他薦を問いません
- ☆ 連絡先：地域医療オープン・ラボ openlabo@jichi.ac.jp

[発行]自治医科大学大学院医学研究科

地域医療オープンラボ運営委員会

事務局 大学事務部学事課 〒329-0498 栃木県下野市薬師寺 3311-1

TEL 0285-58-7476/FAX 0285-44-3625/e-mail openlabo@jichi.ac.jp

<https://grad.jichi.ac.jp/>